

2017. 11. 18

第 8 回ワーク・ライフ・ランス講座「認知症サポーター養成講座」をしました

平成 29 年 9 月 28 日に認知症サポーター養成講座を開催し、85 人が参加しました。認知症は誰でも起こりうる脳の病気で、65 歳以上では 1 割ほどが認知症を患っているとされます。認知症サポーター制度は、厚生労働省が平成 16 年度に導入しました。この講座では、認知症とは何か、認知症の方へどのように対応すればよいのかについて学びました。

司会を高知大学男女共同参画推進室の小島優子准教授が担当しました。認知症サポーター養成講座を通して、介護というケア労働における男女共同参画を学ぶという課題を提示しました。



高知市健康増進課の大川愛氏からは、認知症とは、脳の病気が原因で認知機能に障害がおり、生活に支障がでている状態であることが説明されました。認知症は、加齢によるもの忘れとは異なり、記憶が抜け落ちてしまい、体験したこと自体を忘れてしまう状態です。

認知症の人への具体的な対応の心がまえとして、まずは見守り、余裕を持って対応すること、声をかけるときはなるべく一人で行うこと、後ろから声をかけないことなどが挙げられました。



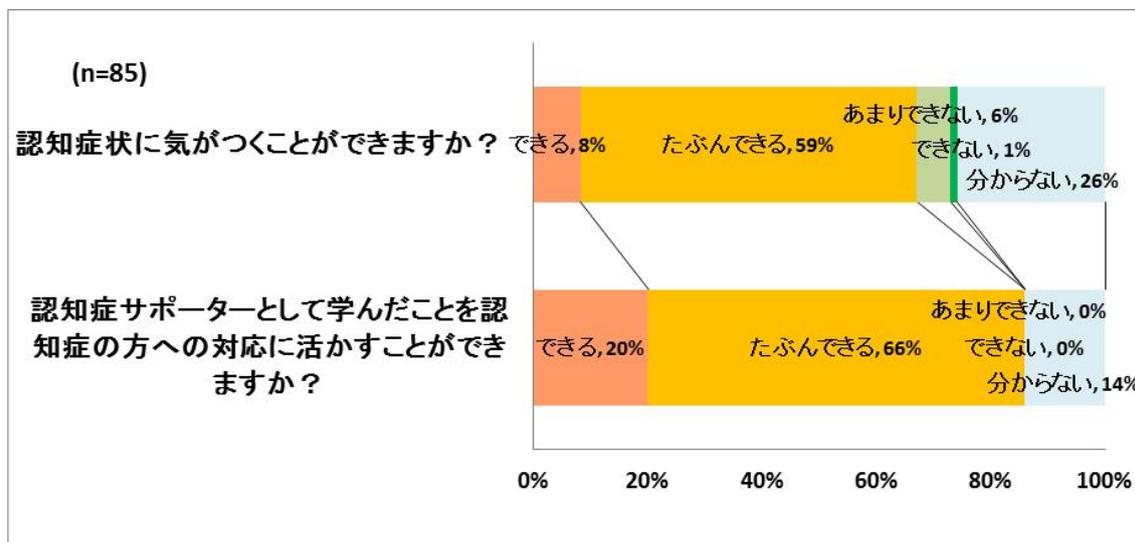
認知症の人と家族の会高知県支部世話人代表の佐藤政子氏からは、認知症高齢者の介護が必要となった時について講演がありました。介護家族は認知症高齢者の思いがけない症状にとまどい、混乱や怒り、拒絶の状態に陥ります。そのような中で、介護者の心理を理解して、日々の暮らしを維持することが重要であることが伝えられました。



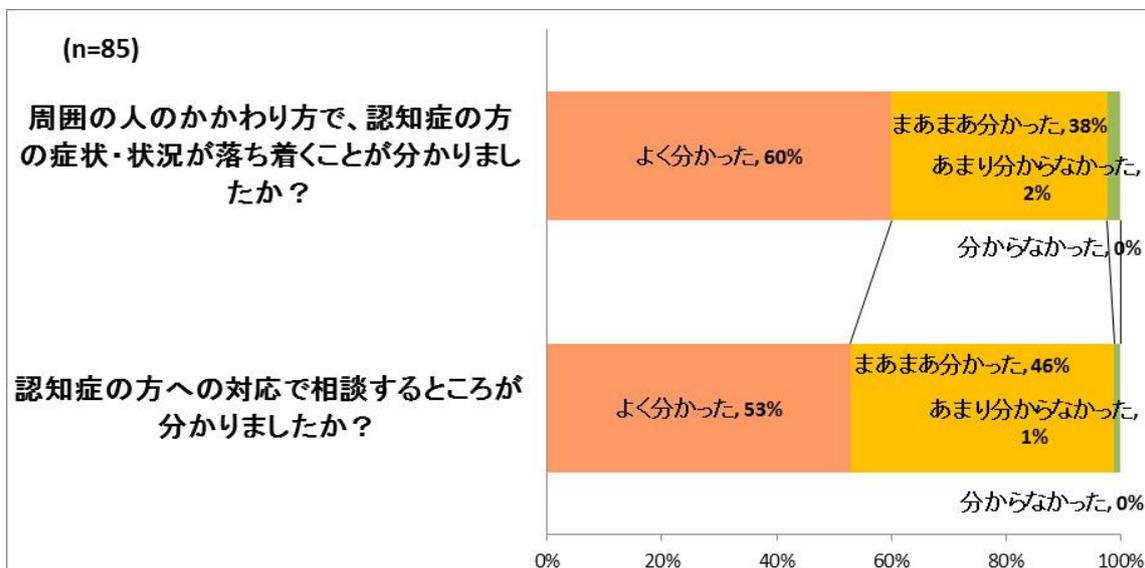
受講者には、サポーターの証となる「オレンジリング」が渡されました。「なぜオレンジなのか知りたい」という学生からの感想がありました。これについては、江戸時代の陶工・酒井田柿右衛門が柿の実からインスピレーションを得て作った赤絵磁器が世界的な名声を誇っているのと同様に、「柿色」のオレンジリングが、世界中で「認知症サポーター」の証として認められればとの思いから、創られたそうです。また温かさを感じさせるオレンジは、「手助けします」という意味を持つとも言われています。



【参加者アンケート結果】



「認知症状に気がつくことができますか」という設問に、「できる」「たぶんできる」と回答した者が67%であったのに対して、「認知症サポーターとして学んだことを認知症の方への対応に活かすことができますか」という設問に、「できる」「たぶんできる」と回答した者は86%と多数であった。参加者は講座を通じて認知症に対して一定の理解を得ており、学んだことを活かすことについてはさらに積極的であることが分かった。



「周囲の人のかわり方で、認知症の方の症状・状況が落ち着くことが分かりましたか」という設問に、「よく分かった」「まあまあ分かった」と回答した者は98%、「認知症の方への対応で相談するところが分かりましたか」という設問に、「よく分かった」「まあまあ分かった」と回答した者は99%であった。参加者は、認知症の方への関わり方が重要であることを理解しており、相談場所についても認識していることが明らかとなった。

【参加者による感想】

- ・私の祖父母が認知症なので、今日学んだことを活かして対応していこうと思いました。
- ・実際に、私の祖母が認知症なので、今までの関わり方を改めて、良い接し方をしていきたいと思いました。
- ・この講座、要介護者を持つ僕にとって本当に有意義でした。もっと広めてください。
- ・9年前に亡くなった曾祖母が認知症だったこともあり、早く受講したかったと思った。
- ・今は、まったく身近に感じないのですが、いつ起こるかわからないので、いつでも、介護できるようにもっと知ることが大事だと思いました。
- ・身近に認知症の人がいないため、実感がわからないことがいくつかあったが、出会ったときに、この講座で教わった対応ができるよう、日ごろから気をつかうようにする。
- ・認知症が何なのかということやその症状がわかり、認知症の人に出会った時の心構えがわかりました。
- ・認知症について、とても分かりやすく説明いただき認知症の理解を深めることができました。
- ・分かりやすい講義だった。認知症について知る機会は若者にとって大切だと感じた。